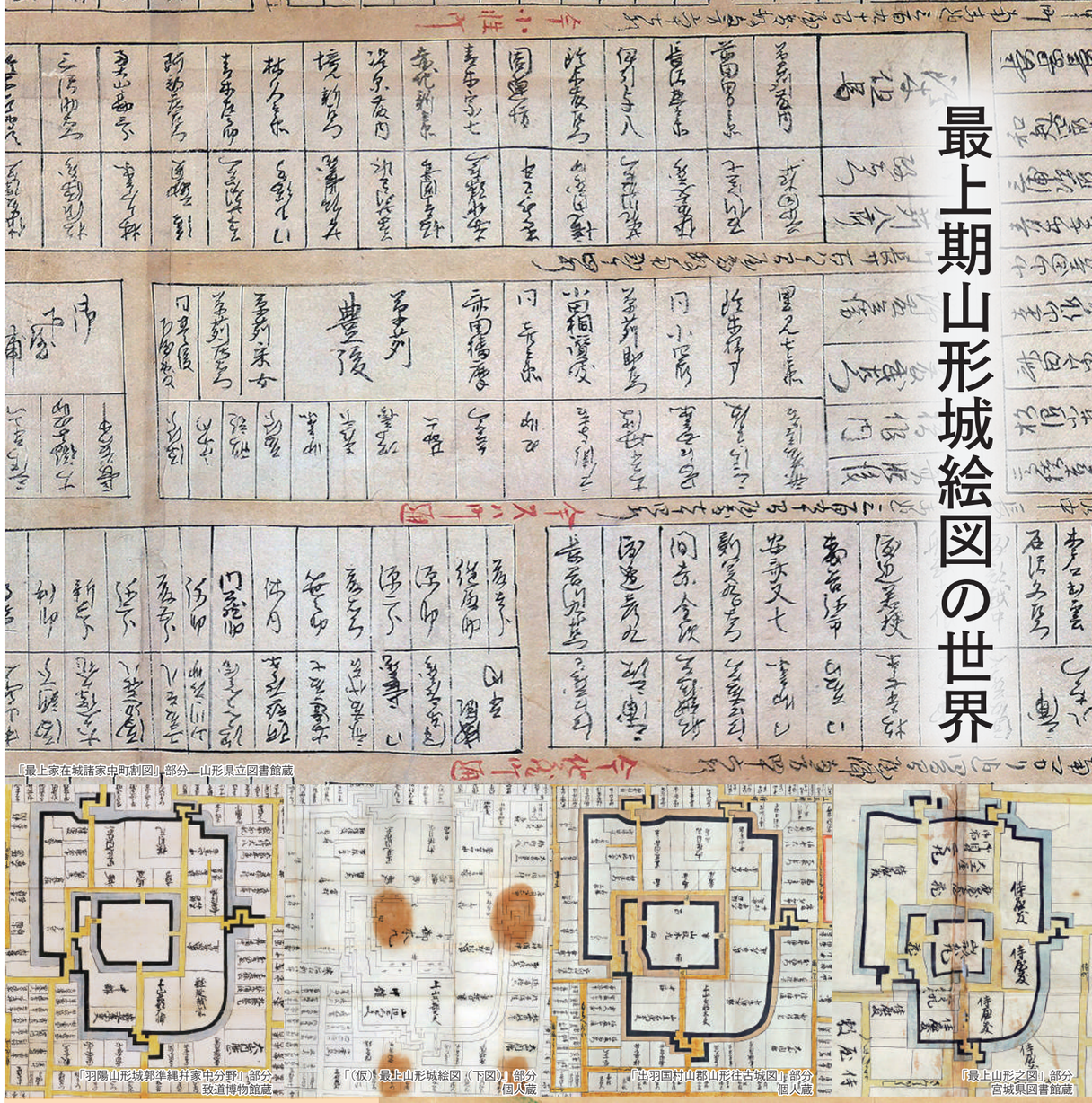
最上期
山形城絵図の世界

東北芸術工科大学　歴史遺産学科

最上期山形城絵図の世界



「最上家在城諸家中町割図」部分　山形県立図書館蔵

「羽陽山形城郭準縄幷家中分野」部分　致道博物館蔵

「（仮）最上山形城絵図（下図）」部分　個人蔵

「出羽国村山郡山形往古城図」部分　個人蔵

「最上山形之図」部分　宮城県図書館蔵

Contents

山形城と城絵図の基礎知識……01
涌谷亘理家本Ⅰ……04
伊藤本・秋元本・致道館本……06
藤原守春本……10
正保城絵図……16
藤原守春本を再考する……23

「出羽国最上山形城絵図」部分　国立公文書館蔵

山形城と城絵図の基礎知識

山形城　地下に埋もれた最上期の山形城　今から四〇〇年余り前、都市山形の礎を築いたのは室町時代に出羽国を統治した斯波氏の末裔―最上家でした。霞城公園の東大手門を入ると最上義光の騎馬像があり、山形城は最上家のお城として市民に親しまれています。義光は織田信長や豊臣秀吉、徳川家康らが天下を競った時代に生きた戦国大名の一人で、この時に山形城は近世城郭としての形を整えました。三重の水堀や石垣、瓦葺建物でお城を荘厳化し、城下町を整備して町割りを行いました。その始まりは史料から文禄元年（一五九二）頃とみられています。最上家が元和八年（一六二二）に改易※1となり、その後、山形城に入ったのは譜代大名の鳥居忠政でした。現在見る山形城の堀や土塁、城門等の骨格は鳥居家の時代に出来上がったもので、最上時代の山形城の姿は長く謎でした。

しかし、近年の発掘調査によって鳥居家以降、幕末まで続いた山形城の地下から最上期の堀跡や御殿跡、屋根を飾っていた金箔瓦などが出土し、徐々に往時のお城が顔をのぞかせています。発掘資料は断片的ですが、今は見られない最上期山形城を知るものに「城絵図※2」があります。絵図にはお城の縄張り※3を特徴付ける堀や土塁、門、城下町の街路や屋敷、河川や水路など豊富な図像情報が描かれます。また侍町や足軽町、町人町といった居住区分や、侍名、寺社名など豊富な文字情報が書き込まれています。

本書は、最上期の山形城と城下町を復元するために不可欠な「城絵図」の世界を皆さんに紹介するために編集しました。山形城絵図の研究は長い蓄積がありますが、これまで大きな絵図を一覧できる写真や難解なくずし字を翻刻したものはありませんでした。私たちは城絵図が研究資料としてさらに活用されるよう所有者の協力を得て、オルソ画像注4とトレース図を作成しました。これに簡単な解説を加えて編集したのが本書です。詳しく調べてみたい方は巻末に参考文献を掲載しましたので参照してください。

本書で取り上げる山形城絵図　最上期の山形城と城下の景観を描く絵図は三〇点余り知られています（『図録山形県城郭古絵図展』財団法人最上義光歴史館、一九九〇年）。本書ではこの中から三点と最上家改易後の景観を描くもの一点を掲載しました。

1「最上山形之図」宮城県図書館蔵（涌谷亘理家本Ⅰ）

2「出羽国村山郡山形往古城図」個人蔵（伊藤本）

3「最上家在城諸家中町割図」山形県立図書館蔵（藤原守春本）

4「出羽国最上山形城絵図」国立公文書館蔵（正保城絵図）

このほか2の関連資料として「羽陽山形城郭準縄幷家中分野」致道博物館蔵（致道館本）と通称「秋元本」個人蔵の二点のオルソ画像を掲載しました。

各絵図には史料名（標題）と山形県立博物館友の会『私たちのたからもの―山形城下絵図』（二〇一三年）で使われた名称を併記しました。

城絵図の種類と年代　城絵図は江戸時代以降、様々な目的で作成されました。最上義光が亡くなった翌年に年号は元和と改まり、幕府は諸大名を統制する目的で武家諸法度を定めました。ここではお城の新造を禁止するとともに、石垣等の修理の際には届け出と許可が必要となりました。全国のお城ではこの「城郭修補願絵図」の控図、下図が伝来し、詳しい縄張りが分かることがあります。また、正保元年（一六四四）に幕府が全国の大名に命じて提出させた「正保城絵図」の正本（清絵図）、控図が残されています。これらは「幕用図」と言われ、記載内容の信頼性が高い資料といえます。本書では一七世紀半ばの山形城の確実な姿を描くものとして「正保城絵図」を掲載しています。

城絵図にはほかに藩の普請会所（土木）や作事所（建築）で作成された「藩用図」があります（山形では秋元家御大工粕川家史料など）。さらにこれら公用絵図の情報をもとに個人が様々な目的で書写した「私用図」があります。

古くは一七世紀中葉～末に軍学者らが縄張り研究のために書写した絵図（『主図合結記』、『諸国居城之図』）が全国に流布しました。軍学系の絵図は縄張りを強調するため土塁や櫓を黒塗りで描くのを特徴とします。正保城絵図や城郭修補願絵図は幕府が図式を定めており、共通した様式で作成されました。

城絵図は一九世紀以降、有力町人や学者、元藩士らの手によって筆写が重ねられました。絵図は過去を追慕する重要なツールであり、その所持が民衆や寺院らにとってステータスとなったからです。地元に伝わる三〇点余りの最上期山形城絵図の存在はそのことを物語っています。

城絵図を読み解くには作成目的と年代を知ることが重要です。年代には「景観年代」と「書写年代」があり、絵図に描かれた景観は必ずしも書写された年代とは一致しません。絵図は「図像情報」と「文字情報」で構成されますが、私用図ではそれぞれ異なる年代のものを合成したり、図像を編集して創作する例は珍しくありません。作成目的がはっきりした公用図以外では注意が必要です。現存する最上期山形城絵図で書写年代が判明するものはいずれも江戸時代後期以降になります。

絵図の見方―図像情報と文字情報　絵図の図像情報には地上に露出するお城の堀や土塁、街路等の人工物と自然景観があります。文字情報には標題や筆写者名、図像説明、添書き等があります。本書に掲載した四枚の絵図をこの二つの視点から比較してみます。

まず、各絵図の図像情報を見ると、城下のみを描いた絵図と河川や山々、在郷の村や田畑まで描いたものがあります。涌谷亘理家本Ⅰには「白川（現在の馬見ヶ崎川）」と「江川（八ケ郷堰）」、「す川（須川）」、「最上川」の四本の河川が描かれています。白川は正保城絵図では羽州街道と交わる場所で「歩渡四十間」（約七〇メートル）もある大きな川でした。白川の支流である江川は正保城絵図では幅「八間」、涌谷亘理家本Ⅰでは一部「かわら」とあります。往時は幅一五メートルほどの自然河川だったことがわかります。大雨の際、二つの河川流域は水害に悩まされたことが想像できます。正保城絵図にはこれとは別に白川から取水する二本の水路が描かれています。三ノ丸を東から西へ貫流しており、「山形五堰」の御殿堰（ごてんぜき）と笹堰（ささぜき）とみられます。

正保城絵図で「千年山（千歳山（ちとせやま））」が描かれ、山の高さや本丸までの距離が書かれています。幕府は正保年間に諸大名に城絵図等の提出を求め、城の防御情報だけでなく、川幅や城より高い所があれば書くように細かな指示を与えていたのです。

道路では城下町を南から北に抜ける羽州街道、お城から東に向かう仙台街道が描かれています。絵図によって道の位置が異なっていて、前者は涌谷亘理本と伊藤本が、藤原守春本と正保城絵図がそれぞれ同じ位置にあります。後者は正保城絵図のみが異なっています。

さて、お城の縄張りはどうでしょうか。山形城は三重の堀（水堀）と土塁に囲まれた日本を代表する輪郭式の平城です。中心には大名が居住する本丸、その外側には蔵や重臣屋敷等が置かれた二ノ丸がありました。本丸・二ノ丸の姿を比べると涌谷亘理家本Ⅰと伊藤本、藤原守春本の三つが似ていて、正保城絵図だけが違うことが分かります。前者は二ノ丸の南東部の土塁・堀が曲線となっているのが特徴です。

最上期には外郭の堀と土塁（総構え※5）の内側に、侍と下級武士である足軽、町人らがブロックを分けて一緒に住んでいました。涌谷亘理家本Ⅰと伊藤本に描かれた姿です。しかし、藤原守春本と最上家改易後の正保城絵図ではここ三ノ丸は侍屋敷となり、足軽や町人、寺社は城外に出されました。居住地が身分により城の内外で区分された格好です。前者では羽州街道は総構えの中を通っていますが、後者ではその外に付け替えられています。後者の街路は共通点が多く、近い時期のものとみるのが一般的です。

総構え（三ノ丸）の城門の数は前者では一〇、後者では一一に増えています。城門（虎口（こぐち）ともいう）の四角い「枡形（ますがた）」に注目すると、涌谷亘理家本Ⅰ等は塁線（堀）の外側に飛び出し、正保城絵図だけが内側に設けられています。それぞれ専門用語で外枡形、内枡形といいます。

以上のように、お城の縄張りは涌谷亘理家本Ⅰと伊藤本が似ていて、正保城絵図とは大きく違っています。藤原守春本は両方の要素を併せ持つ絵図だということが分かったのではないでしょうか。

次に文字情報を見ていきます。涌谷亘理家本Ⅰは文字が少なめですが、伊藤本と町名、小路名、寺名等が共通します。ただし、伊藤本では龍門寺と法性寺（法祥寺）を城内に置いている点は注意が必要です。

藤原守春本と正保城絵図は街路や町割りが似ており、ともに道路の長さが記載されています。前者は「間」、後者は「町・間」で表記され、寸法も微妙に違います。両者の大きな違いは屋敷名や寺社名です。藤原守春本には広い敷地を持つ最上家の重臣屋敷や陪臣（ばいしん）※6の住む下屋敷がいくつもあり、三ノ丸内に最上家始祖を祀る光明寺や宝憧寺、勝因寺といった有力寺院を置いています。その他の寺院は三ノ丸外にあります。また、大手門（七日町口）を出た所には義光が自らの菩提寺として創建した光禅寺があります。ここはのちに鳥居忠政が入ると長源寺（鳥居家菩提寺）になったことから、正保城絵図ではそれが反映されています。

藤原守春本には道路上に町名を朱書きしていますが、その中に「今□□」町という表記がたくさん出てきます。最上期の町割りに筆写当時の町名を書き入れたとみられ、絵図の成立年代を考える上で注目されます。

この他、各絵図は彩色や墨線の引き方、本紙・裏打ち紙の貼り方などもそれぞれ違いがあって興味が持たれます。

藤原守春本は徳川期の最上山形城図か　最上家は秀吉政権の時代と、関ケ原後に徳川政権の大名となってからでは大きな違いがありました。領地は村山、最上に新たに庄内、秋田由利地方等を加えたことで、石高（出羽五七万石）、家臣数は倍増し、これに対応するために城下町も拡張整備された考えられます。

藤原守春本は「最上家在城諸家中町割図」という標題が示す通り、最上期の城下を描くことを目的に作成された絵図です。涌谷亘理家本Ⅰや伊藤本（秋元本・致道館本）と正保城絵図の中間的内容を持つ本絵図を、江戸幕府下における山形城拡張の姿と捉え、改易直前の姿とみる意見が通説化してきました。

本書では細かく論じる紙幅はありませんが、最後に通説とは異なる解釈を示してみたいと思います。本書を利用して最上期の山形城研究がさらに発展することを願っています。

（北野博司）

※1　縄張り：お城の設計や構造のことをさします。
※2　改易：俗にお取りつぶしともいう。大名から領地、家臣、家屋敷等を没収して無力化させること。最上家はその後、近江大森一万石に所替えとなり、義俊が亡くなると五〇〇〇石の旗本となって幕末まで続きました。
※3　城絵図：城郭に関する絵図は目的に応じてお城の主要部のみを描いた「城絵図（全体図・部分図）」と城下町全体を描いた「城下絵図」があります。本書で取り上げる絵図は城下絵図に属するものですが、ここでは両者を合わせて「城絵図」として記述していきます。
※4　オルソ画像：全体を真上から見た正射投影画像。周辺部に歪みはありません。
※5　総構え：お城の外郭の土塁と堀、またはそれに囲まれた内部のことをいう。「総堀」ともいう。
※6　陪臣：大名の家臣がそれぞれ抱える侍。大名直属の侍は直臣（じきしん）という。

1「最上山形之図」宮城県図書館蔵（涌谷亘理家本Ⅰ）

涌谷亘理家本Ⅰは伊達家の一門である涌谷亘理家（涌谷伊達家）に伝来した絵図です。特筆されるのは、山形城下の外に広がる自然景観を描いているところです。周囲を「白川（馬見ヶ崎川）」、「江川（八ケ郷堰）」、「す川（須川）」、「最上川」の四つの河川と山々が取り囲み、東には「千年山（千歳山）」、西には「戸神山」、「陳山」の表記がみられます。また、城下から山麓の村々に至る道、脇街道も描かれています。正保年間に城絵図とともに作成された国絵図では郷村を丸で囲み、その間の道を朱線で結んでいます。図様としては国絵図と似たところもあります。

城の縄張りは、土塁を黒太線、堀を水色で表します。本丸の四辺には四つの門があり、南門の土塁だけがつながっています。伊藤本ではここを「埋門」（木橋か）としています。北門は「土橋」、東門は「橋」（木橋か）と書き分けています。二ノ丸は北側に二つの門があって、縄張りは伊藤本等と類似します。総構えの土塁には一〇箇所の門があり、北辺の三つは内枡形、その他は外枡形となっています。羽州街道は南の「上山口」から入り、総構え内の八日町、七日町、旅籠町を通って北へ抜けています。

彩色は墨を含め五色で、河川・堀を水色、土塁を黒色、街路を黄色、山を緑（濃淡）で塗り、在郷道等は赤で線描きしています。街路の線描はフリーハンドですが、細く丁寧です。

文字情報では、本丸に「山形本丸」とあり、敬称の「御」が付いていません。一方で幕府から派遣される目付には「御」を付けています。ちなみに伊藤本も本丸は「山形本丸」と表記しており、両者の類縁性が見てとれます。二ノ丸には重臣屋敷のほか、蔵や役所、作事小屋、馬屋、鷹の飼育小屋があったことがわかります。

総構えの街路には町名や小路名が書かれていますが、これらには伊藤本や致道館本と共通する名称が多くみられます。

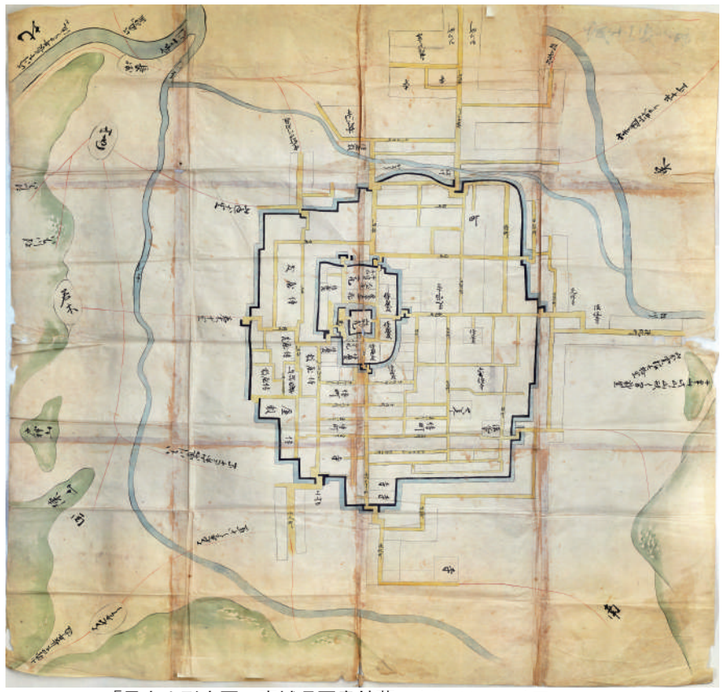
屋敷名では上級家臣の「侍屋敷」と中下級の「侍町」を書き分けています。総構えの内には「足カル町」「十日町」「八日町」「七日町」「大工町」「旅籠町」「ふつはり（吹張）町」「えとう町」「鷹師町」「肴町」「もちひへ」「けいたう」「小人上町」「さくらかう」（桜小路）」「ウラカウシ（裏小路）」、総構えの外には「宮かうじ（小路）」「小人町」「鉄砲町」「伊賀町」「かち（鍛冶）町」があります。「小人」は武家に奉公する「小者」を指すとみられます。町人（商人・職人）は街道沿いに配置され、侍、足軽、小者らとそれぞれブロックを分けながらも、全体としては混在していた様子が窺えます。

寺社では総構え内に「光明寺」「宝憧寺」「法花寺」「せいかんし（誓願寺）」ほか三寺、総構えの外には「龍門寺」「法性寺（法祥寺）」「光禅寺」ほか三寺、「両所之宮」があります。内外を問わず重要な寺社についてはその所在を明示しています。

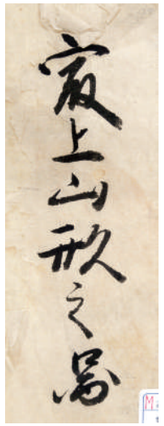
本絵図では在郷の村々や道の名前を書いています。村は「長崎」「若木」「山辺」「はせたう（長谷堂）」、道は「川西通」「いも川（五百川）通」「小瀧口下長井通」「山寺道」があります。総構えの城門から村までの距離は「里」単位で記載され、数値は十里、弐十里とアバウトですが、ここでは一里が六〇〇メートル前後で表記されていることが重要です（齋藤二〇二〇）。江戸初期に幕府が定めた一里は約四.〇キロメートルで、これと比べるとかなり短いことが分かります。距離については古い表記法にしたがって書かれたといえます。

本絵図の景観年代を示す図像や文字情報は伊藤本等とともに最上期に遡る内容を持っています。しかし、書写年代の推定には縄張り表現や彩色法を含め、別途検討が必要になります。

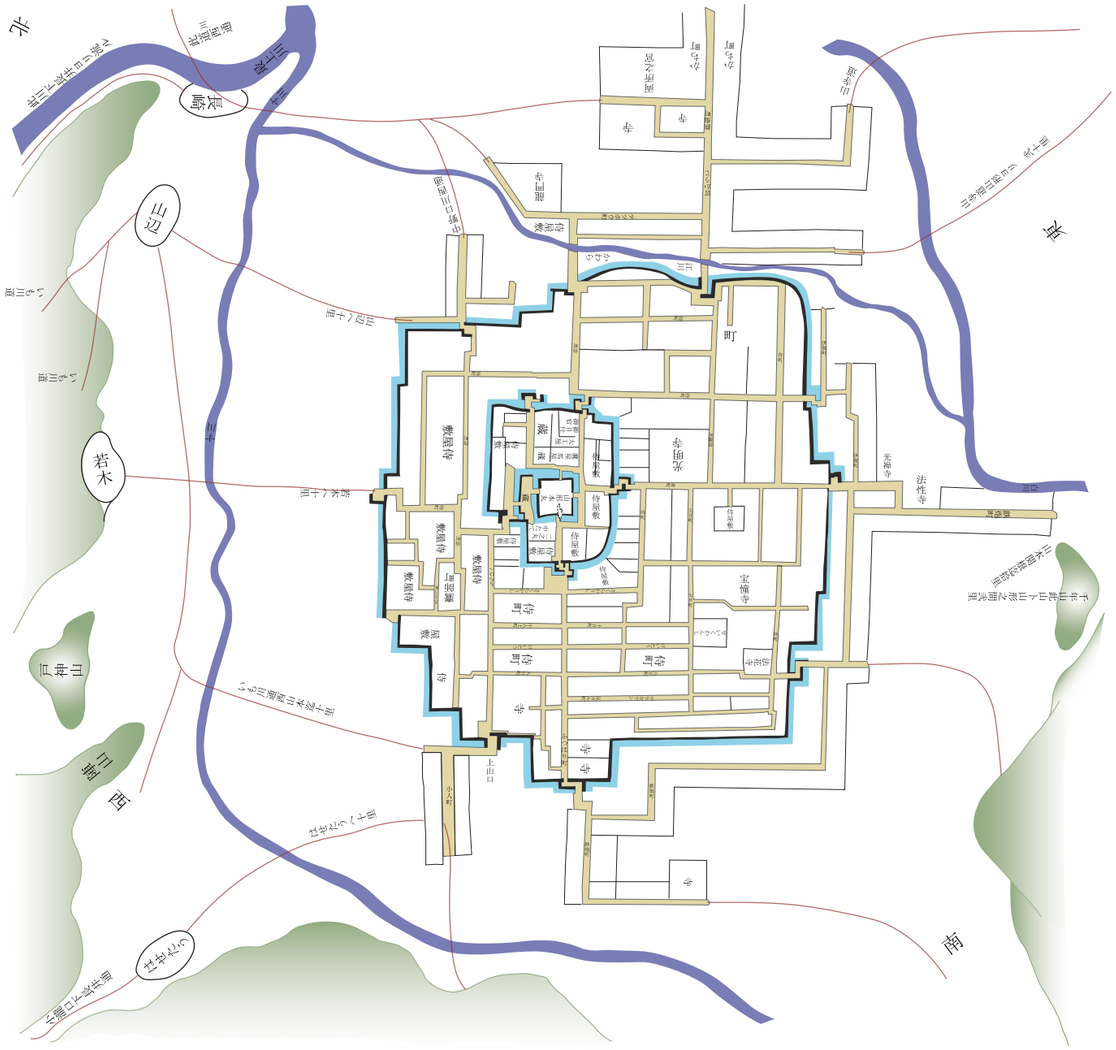
（北野博司）



「最上山形之図」宮城県図書館蔵　南北 109cm× 東西 114 cm



端裏標題



「最上山形之図」トレース図

2「出羽国村山郡山形往古城図」個人蔵

（伊藤本）

本項では伊藤本を中心に解説し、類本である秋元本、致道館本についても紹介していきます。

伊藤本は総構え内を描いた城下絵図で東が上になっています。南東隅に標題「東山道八箇国之内　出羽国村山郡山形往古城図」が掲げられ、下に「最上郷金井庄」と添えられています。北西隅には絵図の来歴が分かる書き入れがあります。六日町の検断（けんだん）（町方支配）を務めた工藤喜兵衛の署名の脇に、この図面は菅野與四郎が旅籠町後藤氏から借り受け、伊藤太兵衛が写したと書かれています。江戸後期に町人が城絵図を所持し、有力町人らの手に筆写が重ねられていたことを示しています。北東隅には文化七年（一八一〇）と書写年が明記されています。

この他、南西隅にお城の規模が書かれています。本丸の四周が四六五間、二ノ丸が九五五間、総堀（総構え）が三三二七間とあります。秋元本も同様ですが、致道館本は「本城、二之郭、三之郭」と表記し、それぞれの郭の東西、南北の長さも書いている点に違いがあります。

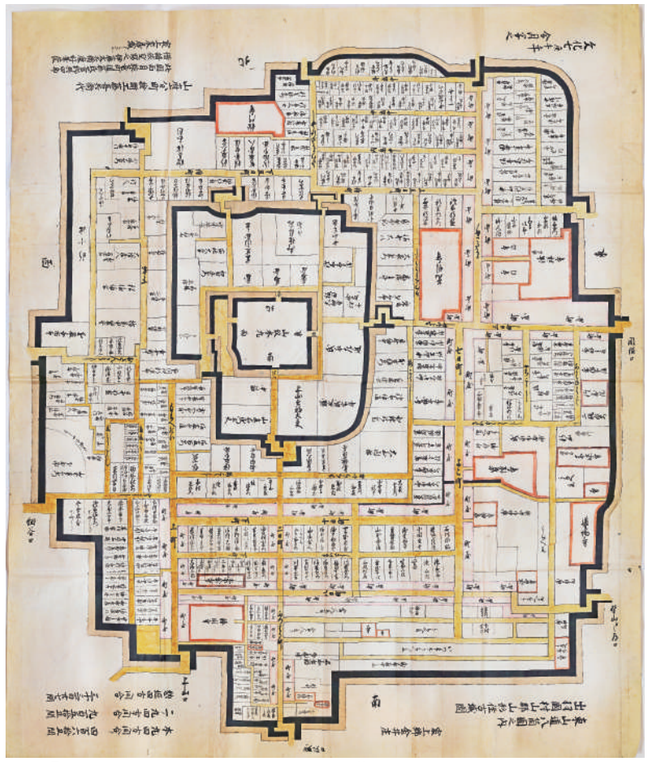
伊藤本の三重の土塁と堀で囲まれた城の縄張りは涌谷亘理家本Ⅰとよく似ています。本丸の四方には城門があり、北は「土橋」、東は「橋」、南は「埋門（うずみもん）」と書かれています。南門は黒線が細くつながっており、土塁をくぐる埋門の形式になっていたとみられます。本丸の西側には出廓があり、涌谷亘理家本Ⅰではこの部分を「蔵」と表記しています。

二ノ丸の城門は北に二か所、東・南・西に各一か所あり、いずれも外枡形となっています。三ノ丸には十か所の城門があり、そのうち北の三か所は内枡形となっています。名称は東から南へ「関根口」「野山江之道口」「畑谷口」とありますが、それ以外には表記がありません。屋敷数（寺社等含む）は二ノ丸、三ノ丸合わせて四三八です。

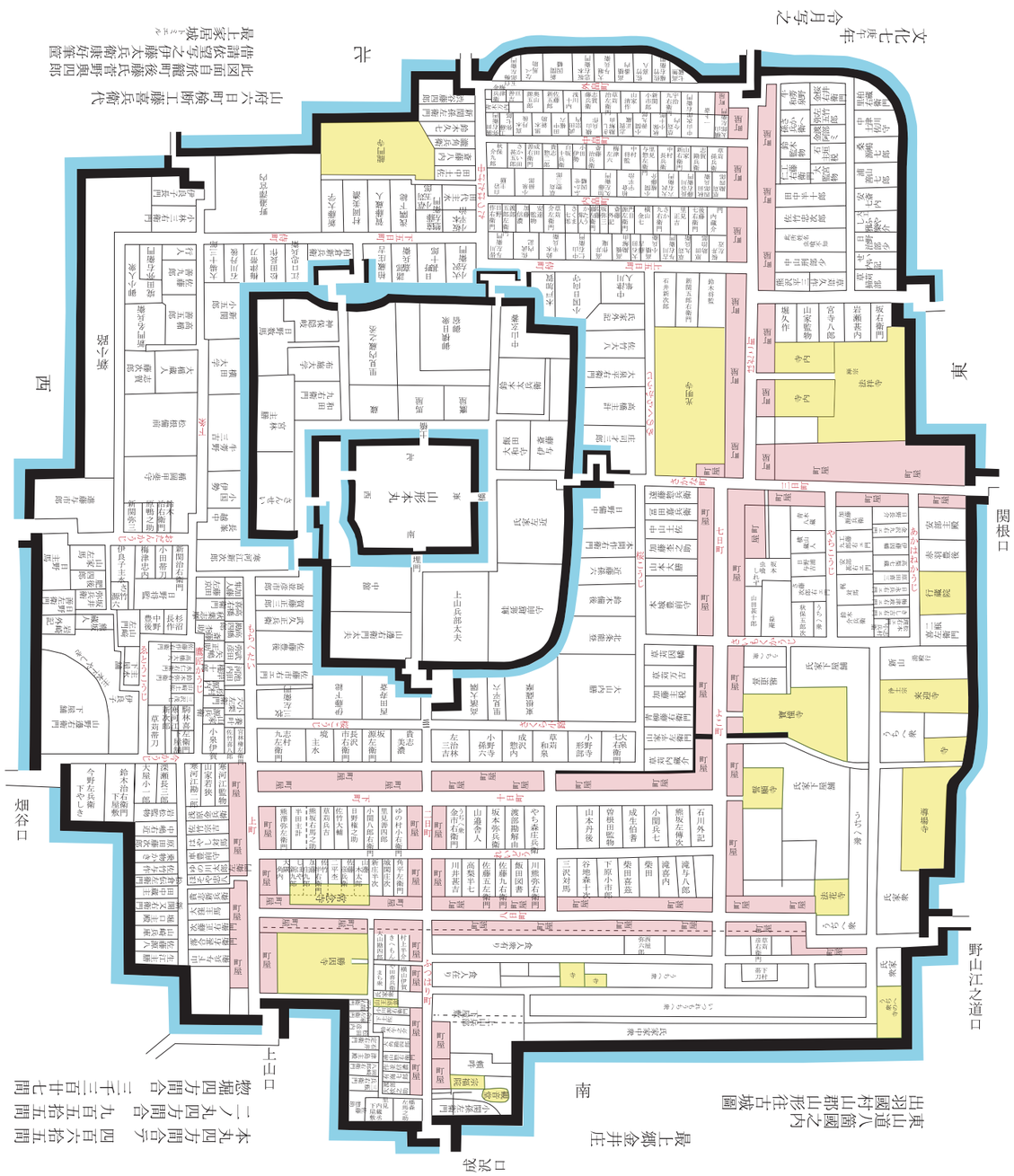
羽州街道は「上山口」から城内へ入り、八日町、よこ町、七日町、はだこ（旅籠）町を通り北へ抜けています。涌谷亘理家本Ⅰや類本と同様で、三ノ丸外を通る藤原守春本や正保城絵図とは異なっています。

伊藤本の彩色には五色が使われています。土塁は黒色、堀はうす茶色、道路は黄（土）色で塗られています。屋敷地では寺社を赤（朱）色、町屋を桃色の太線で囲み強調しています。

伊藤本と涌谷亘理家本Ⅰは共通点が多いものの、違いとして注目したいのは「法祥寺」と「龍門寺」の位置です。涌谷亘理家本Ⅰでは総構えの外の東と北にそれぞれあります。伊藤本等では二寺は総構えの内にあり、東と北の土塁に沿うよう書かれています。最上家に縁（ゆかり）のある二寺を城下に取り込んだようにも見えます。



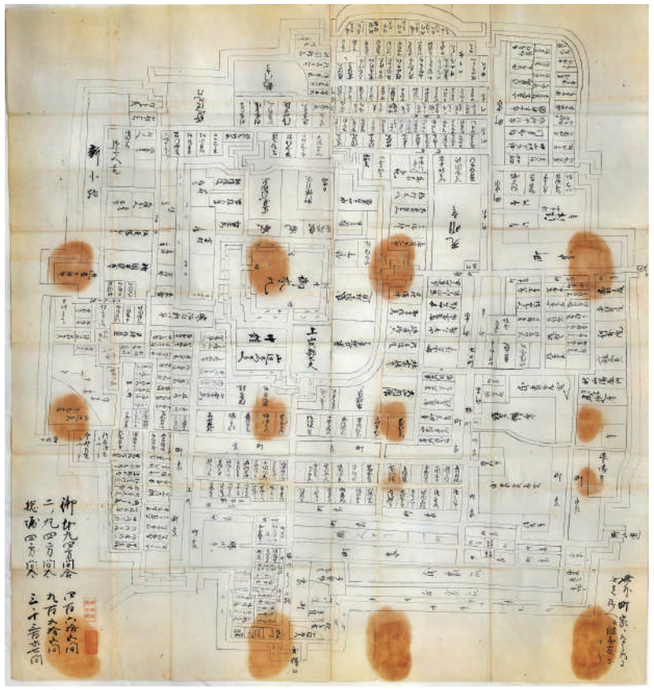
「出羽国村山郡山形往古城図」個人蔵　南北 101.0cm× 東西 89.5 cm



「出羽国村山郡山形往古城図」トレース図

「（仮）最上山形城図（下図）」個人蔵（秋元本）

秋元本は一七六七年～一八四五年まで山形城主を務めた秋元家家臣の家に伝わった絵図です。絵図の南西に二つの蔵書印があり、古印体のほうは「秋元臣黒子蔵」と読めます。この絵図は標題、彩色がなく、ラフな筆致から「下図」とみられます。絵図の天地は「御本丸」の文字から東を上にしたとみられます。



「（仮）最上山形城図（下図）」個人蔵　南北 101.0cm× 東西 89.5cm

添書きは北を上にして南東隅に「此外町家ト道之内に無足人給人并組屋敷等アリ」と書かれています。「町家ト道之内」がどこを指すか定かではありませんが、無足人（郷士あるいは切米取）、給人（知行取）、組屋敷（下級武士の集合住宅）について触れているのはこの絵図だけです。

本丸への通路は東にのみ「橋」とあります。土塁は「土居」の表記もありますが、ほとんどが片仮名で「トイ」、堀は「ホリ」と書いています。彩色しない下図ならではの簡略化した表現とみられます。

侍名の記載に貼り紙で訂正した箇所があります。二ノ丸の「氏家左近」は「江」と書いた上に紙を貼り「家」に改めています。また、三ノ丸の「北条能登」と「大山内膳」は貼り紙の上に書かれており、訂正前は左右逆になっていました。

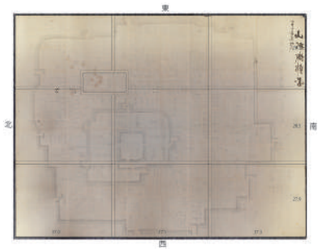
本絵図には茶色のシミがあります。付着した時期は不明ですが、これによってその時の絵図のたたみ方がわかります。

「羽陽山形城郭準縄并家中分野」致道博物館蔵（致道館本）

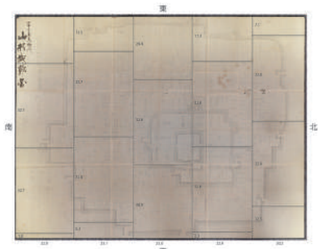
致道館本の標題は東を上にして「出羽守少将最上義光公御代」「羽陽山形城郭準縄并家中分野」とあり、端裏に「最上義光時代山形城郭図」とあります。標題の脇には旧蔵を示す「致道館蔵書印」があります。庄内藩の藩校致道館は明治六年（一八七三）に廃校となったことから、それ以前に書写された絵図であることが分かります。標題の下にはお城の規模を示す書き込みがあり、本絵図には伊藤本や秋元本にない東西・南北の長さが記載されています。

この絵図の彩色は三色で、土塁は黒色、水堀は青色、道路は黄色で塗られています。

書誌情報として本紙・裏打紙の料紙の貼り合わせを観察しました。本紙は三七．三×二八．



致道館本　本紙貼り合わせ



致道館本　裏打紙貼り合わせ

五センチメートルの料紙を三×三、計九枚を貼り合わせています。貼り合わせ方向は規則的ではがされた形跡はありません。ただし、光明寺の一角は一旦切り取られ、裏から別の切り紙を貼り付けています。筆写時に部分的な修正が行われたようです。裏打紙は三二．八×一三．〇センチメートルの料紙を切り取って横に貼り合わせています。元はロールのような紙だったのでしょうか。

＊

三枚の絵図を比較する

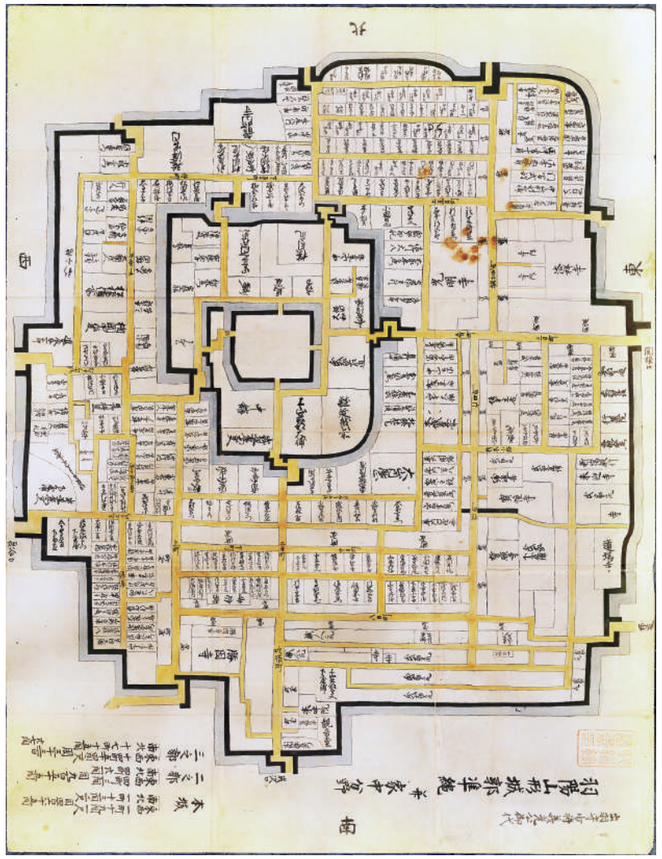
伊藤本、秋元本、致道館本は総構え内のみを描く似た図様の絵図です。しかし、比較してみると細かな違いがあることも分かります。そのいくつかを紹介します。

まず図像情報で目に付くのは、十日町から横町付近にある土塁（黒い太線）です。伊藤本では町屋背後のL字形のものと横町を横断するものがあり、後者の方が太く表現されています。致道館本では前者は描かれず、後者の土塁のみとなっています。秋元本では土塁はまったく描かれていません。初期山形城の姿を垣間見る注目すべき遺構です。

次に文字情報です。一般に公用図等では幕府や大名家の施設に対して「御」の敬称が付けられます。三つの絵図を比較すると、伊藤本では、「山形本丸」「御横目衆御宿」と書かれており、最上家に対して敬称は付けられていません。秋元本では「御本丸」「御横目衆御宿」とあり、最上家、幕府の両方に敬称が付けられます。致道館本では、「（記載なし）」「横目衆」とあって両方とも敬称は使われていません。

また、絵図を写す際に虫食いで姓名が分からなかった箇所がみられます。伊藤本では「此所姓名虫喰知れず」、「坂本虫喰しれず」と二カ所に虫食いで文字が読めなかったとあります。秋元本ではそれぞれ「門間式部」、「坂本名知れず」とあって、前者については読めていました。一方、致道館本ではそれぞれ「門間式部」、「坂本主殿」と読めています。もし仮に、三つの絵図が同一の原本を写していたなら、致道館本、秋元本、伊藤本の順で書き写された可能性があります。しかし先に取り上げたように、三つの絵図には少なからぬ違いがあり、同一の絵図を写したと考えるには無理がありそうです。山形藩秋元家の時代に書写された二つの絵図の系統関係は比較的近いとしても、庄内藩酒井家に伝来した致道館本との関係は更なる分析が必要となるでしょう。

（遊佐穂乃香）



「羽陽山形城郭準縄并家中分野」致道博物館蔵　南北 111.6cm× 東西 85.7cm

3「最上家在城諸家中町割図」山形県立図書館蔵（藤原守春本）

藤原守春本は江戸時代後期に「藤原守春」によって書写された城下絵図です。本絵図で特筆されるのは、山形城外まで屋敷名が詳細に描かれている点です。本書で取り上げる絵図の中では藤原守春本と正保城絵図に見られる特徴であり、城内外合わせて一六一五もの屋敷が描かれています。

本絵図は軸装されており、上巻絹には外題となる題箋（「最上家在城諸家中町割図」）が貼られています。上部には隅丸正方形と楕円形の二つの蔵書印が押されており、前者は「行啓記念山形県立図書館蔵書（篆書体）」、後者は「山形県立図書館・昭和四一年八月廿五日」とあります。行啓記念山形県立図書館は明治四三年に開館し、翌年の山形北部大火で蔵書一万冊余りを焼失しました。その後、同図書館は昭和九年に山形県中央図書館に指定され、昭和二五年には山形県立図書館と改称されています（『山形県立図書館要覧』）。こういった背景から、本絵図は戦前にすでに県立図書館に入っており、現在まで保管されてきたことが分かります。

藤原守春本は、本丸と二の丸の形態・屋敷割が涌谷亘理家本Ⅰや伊藤本等と類似しています。しかし、本絵図では二の丸と本丸を繋ぐ城門は東西の二箇所しか存在せず、四方に一箇所ずつ城門がある涌谷亘理家本Ⅰや伊藤本等とは異なっています。二の丸は北側に二つ、それ以外には一つずつの合計五箇所に門があり、いずれも外枡形となっています。二ノ丸を取り囲む水堀は南東角が曲線となっており、これは涌谷亘理家本Ⅰや伊藤本等とも共通しています。本絵図の特異な点は、二の丸堀と三ノ丸の街路との間には灰青色に塗られた空間があることです。これは本書で取り上げる他の絵図にはない表現です。あたかも正保城絵図の三ノ丸に伊藤本等でみられた本丸、二ノ丸をはめ込んで描画したようにも見えます。

三の丸には北側に内枡形の門が三箇所（小橋口、肴町口、下条口）、東側には外枡形が二箇所（鎬口、十日町口）、枡形のない平入りの門（七日町口、横町口）が二箇所の計四箇所、南側には外枡形（八日町口）と内枡形（稲荷口）の門が各一箇所、西側には外枡形の門が二箇所（小田口、飯塚口）、合計十一箇所に門があります。三ノ丸の門の数は正保城絵図と同様ですが、大手の七日町口を平入で描くなど、不自然な点があります。さらに朱書された小田口と飯塚口の表記が逆転しています。

三の丸内部の景観では街路の骨格が正保城絵図と類似する一方で、小田口（飯塚口の誤り）に位置する「山邉右衛門太輔下屋敷」や八日町口の先にある「勝因寺」の部分では正保城絵図にある街路が屋敷地と重なり欠落しています。城下町らしい「鍵の手」や「食い違い」の道を省略しているところもあります。

羽州街道はこれまでの絵図と違い、三ノ丸（総構え）の外側に付け替えられたように描かれています。街道は上町通りから五日町を東進し、八日町口の前で鍵の手となり、八日町に続きます。ここで直角に折れて北進し、木町、十日町、ヨコ町、七日町、ヨコ丁、ハタゴ（旅籠）町、六日町、カチ（鍛冶）町、宮町、銅町と進んで城外へ抜けていきます。五日町と八日町の通りは実際には八日町口の鍵の手を挟んで方向が若干ずれており、北に折れる十日町通りとの角度は鈍角になっています。正保城絵図はこれを正確に表現しますが、本絵図では概念的に描いています。

街路の線描は比較的丁寧に見えますが、屋敷割のところでは線が交わらない、斜行するなどやや雑な印象があります。特に羽州街道沿いの町屋部分（朱線）では顕著です。

彩色の面では、本丸内を赤でベタ塗りしているのが目立ちます。本丸・二の丸の土塁は黒と白の二重で表現します。頂部が黒、土羽斜面が白とも解釈できますが、他の絵図では見ない特徴と言えます。水堀は青（紺）色で表現しています。三の丸の土塁は黒のみなので、白は本丸等を強調する絵画的な表現なのかもしれません。

三の丸はこれまでの絵図と違い、町屋や足軽町、小人町がなくなり、大小の侍屋敷で埋められています。面積の大きい重臣屋敷は薄いピンクで彩色されています。寺社は「光明寺」「宝憧寺」「勝因寺」等、主要なものは三ノ丸内にありますが、多くは三ノ丸外にあって城下を取り囲むように配置されています。寺社は三ノ丸内外を問わずピンク色に塗られています。

本絵図で特徴的なのは「法光院（八幡宮）」、「諏訪明神」、「楯岡甲斐守下屋敷」背後の空間に、木々と赤焼けの空が絵画的に描かれていることです。河川は三ノ丸の北を流れる江川（後の八ケ郷堰）のみで白川（現在の馬見ヶ崎川）は描かれていません。彩色は水堀と同じ青（紺）色です。城下町外縁は灰青色（青を水で薄めた）で縁取られ、縁辺には「ぼかし」がかけられています。

外題

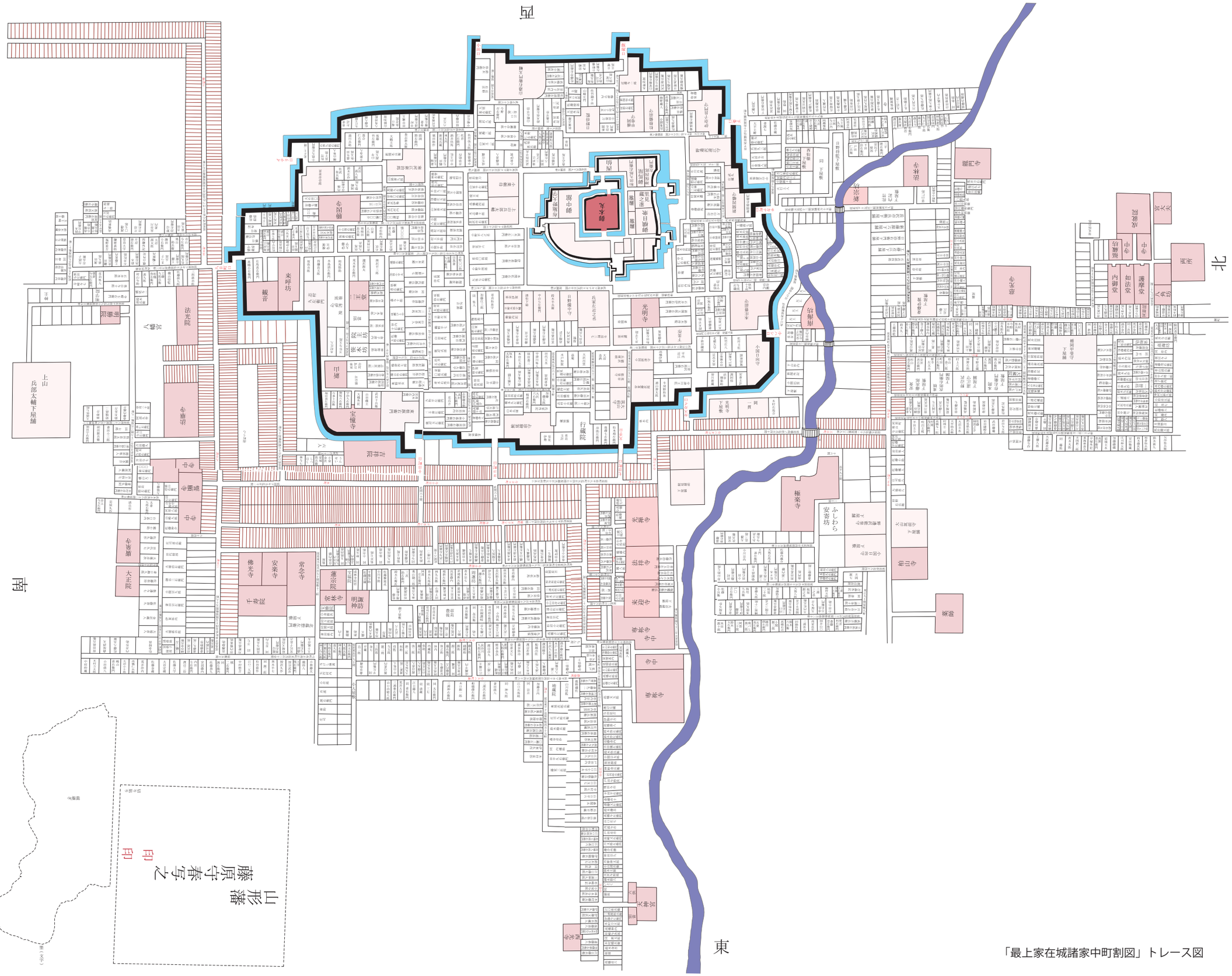
「文齋」

「守春之印」

文字情報では、まず本丸・二ノ丸内の表記に「御本丸」「御中館」、「御蔵」、「御馬屋」と全てに敬称の「御」が付いている点が注目されます。家中による絵図作成への関与が想定されます。また、二の丸内の東から南にかけて屋敷名が空白となっています。伊藤本等ではここに「鮭延越前」「上山兵部大夫」「氏家左近」らの屋敷がありましたが、本絵図では三ノ丸に置かれています。

三ノ丸の屋敷数は五一五あり、寺院は「光明寺」「宝憧寺」「勝因寺」「二王堂」「観音」の五カ寺、院坊は「行蔵院」「院主坊」「笹本坊」「来呼坊」の四カ所で、総じて南部に偏在しています。

「最上家在城諸家中町割図」山形県立図書館蔵　南北 233 ㎝ × 東西 184 ㎝



「最上家在城諸家中町割図」トレース図

三ノ丸外の寺院はいくつかのブロックをなし、街道や町屋を取り囲むように配置されています。寺は「専称寺」「法祥寺」「龍門寺」など三〇箇所、院坊は「高海坊」「実相坊」など二三箇所、神社は「両所」「天満宮」など五箇所でした。屋敷数は侍、同下屋敷、足軽、その他あわせて一〇一六ありました。その他には寺社関係の屋敷（別当・神主・院居・六供・寺下屋敷）、医者・学者等（□庵・□斎）、大工、座頭、六尺、ちん屋（狆屋か）などがあり、都市に住む多様な住民層を窺うことができます。侍姓のベスト一〇は三ノ丸内外合わせて、鈴木、佐藤、高橋、草苅、斎藤、三浦、加藤、荒井、工藤、大沼の順でした。現代の山形市民とよく似ています。

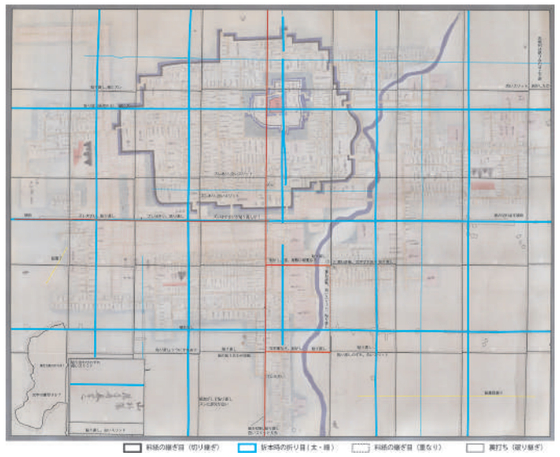
街路には道路長（間・尺）と沿道の屋敷数が書かれています。正保城絵図では屋敷数はなく、三ノ丸外は道路長の記載もありません。

藤原守春本では文字の訂正が一二箇所ありました（下表）。書き直しは水消しが主体で、墨消しや添え書きもあります。また、城内外の屋敷一五三五箇所のうち、同姓同名が十八組存在しました。近接するものは同一人物が二つの屋敷を所有していた可能性はありますが、遠距離にあるものも少なくなく、実態を反映しているとは考えにくい所です。

藤原守春本はもともと折紙でした。絵図には裏打ちがあり、複数回の修理が確認できます。料紙をはがして貼り直した際に生じた線や文字のずれ、重なりがあります（下図）。本紙の折り目から折紙段階のたたみ方を復元すると、少なくとも1回は折り方を変えていることが分かります。南北方向中央の折り目で本紙が裂けるほど傷んでおり、切れた部分は裏から細長い紙をあてがい表面を補彩しています。もとは南北三本、東西三本の折り目で略正方形にたたまれていたものが、次の段階では南北三本、東西五本の折り目にたたみ直されていました。折り数を増やしてより小さくたたんだ格好です。折り目の傷み具合から、旧蔵段階でかなり利用されたとみられます。本絵図の写しが多いことと関係するかもしれません。

料紙の寸法から軸装の際に周囲を若干断ち落としていることが分かります。また「山形藩藤原守春写之」の署名と朱印（「文斎」「守春之印」）部分は本紙から一旦切り取られ、九〇度回転して貼り直されています（市村二〇二〇）。さらに守春の署名の下には不整形な破り継ぎ（本紙を「喰い裂き」し、裏から紙を貼る）があり、文字の存在を窺わせる墨痕が確認できます。詳しい修理履歴を知るためには裏面も含めたさらなる調査が必要です。

（扇采加・遊佐穂乃香）

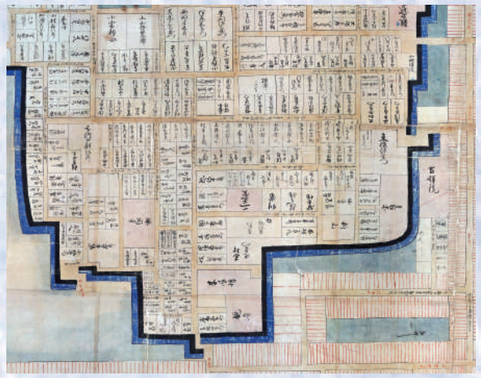


絵図の書誌情報（折り目、料紙の継ぎ目、補修）

	訂正後	訂正方法	訂正前
1	笹原九郎右衛門	水消し	不明
2	鈴木又吉	水消し	不明
3	塚沢喜右衛門	水消し	不明
4	戸田仁兵衛	水消し	不明
5	下田重右エ門	水消し	不明
6	安比子掃部	水消し	不明
7	三平理右衛門	水消し	不明
8	鈴木平左衛門	水消し	不明
9	うんせい	水消し	「武田十□郎」
10	小泉金次	水消し	「山田蔵主」
11	斎藤九郎	墨消し	「郎」の字
12	高田の左に「田中」右に「ヒ」	見セ消チ	高田近内

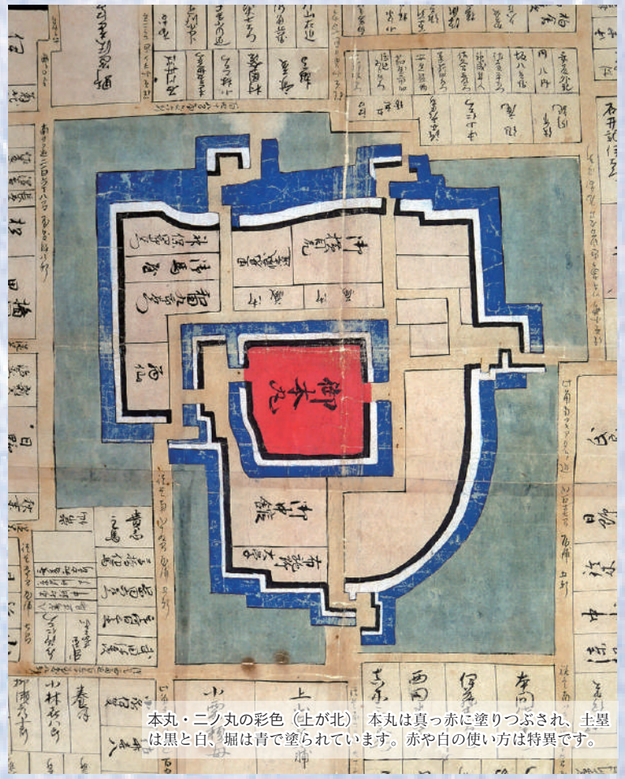
藤原守春本にみる文字の訂正

画像は「最上家在城諸家中町割図」山形県立図書館蔵より抜粋



三ノ丸南部の侍屋敷（上が北）　上級家臣は三ノ丸内に広い屋敷地を持ち、三ノ丸外に陪臣の下屋敷を配しています。二ノ丸南門や三ノ丸虎口のような防衛上重要な場所には上級家臣の屋敷がみられます。

足軽屋敷と小人屋敷（上が西）　三ノ丸外の東側には苗字がなく名前だけの人々と、空欄の屋敷があります。前者は足軽、後者は武家に奉公する小者らの屋敷とみられます。



本丸・二ノ丸の彩色（上が北）　本丸は真っ赤に塗りつぶされ、土塁は黒と白、堀は青で塗られています。赤や白の使い方は特異です。

守春本に見られる絵画的表現

破り継ぎ（上が西）

切り継ぎ（上が北）

文字の訂正（上が西）

4「出羽国最上山形城絵図」

国立公文書館蔵（正保城絵図）

本絵図は正保元年（一六四四）、幕府が諸大名に命じて提出させた城絵図です。正本は江戸城内に伝来しましたが、各地にはその控図や下図が残り、その後の絵図作成の基礎となりました。絵図にはお城の天守・櫓・塀等の建築物、堀・土塁・石垣等の土木構造物がその規模とともに詳しく描かれています。幕府が諸大名を統制するためにお城の軍事情報を細かく報告させたもので、信頼性の高い史料といえます

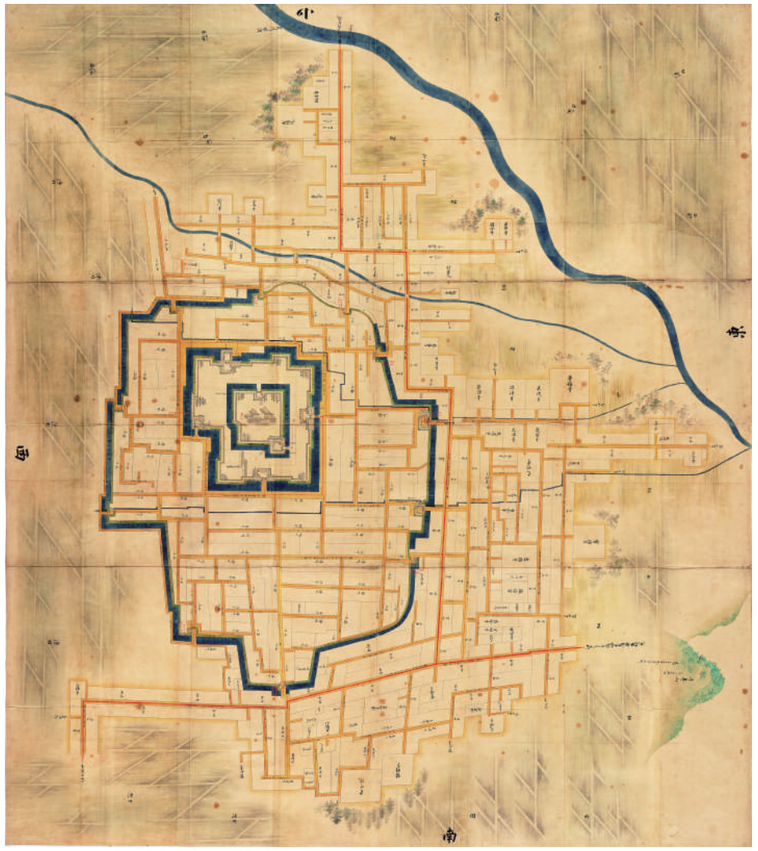
本絵図にはお城の北側に二本の河川が描かれます。現在の馬見ヶ崎川と八ケ郷堰にあたり、両河川は涌谷亘理家本Ⅰでは「白川」、「江川」と表記されました。また、白川から取水した二本の水路（御殿堰・笹堰）が描かれています。流路はそれぞれ大手口と横町口から三ノ丸に入り、下条口の西（土橋）と飯塚口から水田地帯へ抜けています。

城の西側の沖積地や白川北方の河間低地は「深田」、東側の扇央部や扇側部は「畑」や「田」となっており、水利環境に応じた土地利用の様子が垣間見えます。城の南東部には千歳山が描かれ、高さ三五間（約六三メートル）、本丸までの距離三七町（約四.〇キロメートル）と記載されています。

本丸・二ノ丸の縄張りは幕末まで続いた山形城の姿です。元和八年（一六二二）、改易になった最上家に代わりに山形に入部した鳥居忠政が幕府の資金をもってお城の改築にあたりました。本絵図では本丸の虎口（出入口）が藤原守春本と違い、北辺中央と南東角にあります。前者は内枡形ですが、後者は堀内にありながら本丸から飛び出す枡形になっています。類例は同じ頃に築かれた福島県棚倉城にみられます。

二ノ丸は南東部が直角に折れ、虎口の数は一つ減って四つになりました。虎口は内枡形（北門のみは複合型）で、石垣、櫓門を備えた荘厳な作りになっています。かなり大規模な改築工事だったことが窺われます。近年の山形城跡の発掘調査ではこの時に、最上期の本丸堀の外側に新たに深い幅広の堀を掘削し、本丸を拡張しつつ高く盛土したことが分かっています。

本絵図は本丸に御殿とみられる木羽葺き建物七棟と「井戸七」、二ノ丸に二棟の瓦葺き建物と「御城米御蔵屋敷」の文字があります。



「出羽国最上山形城絵図」国立公文書館蔵　南北 305cm× 東西 268cm

三の丸は侍町でした。守春本では「光明寺」をはじめとして最上家縁の寺院がいくつかあったのに対し、正保城絵図では南の搦手付近にある大奥寺や仁王堂以外に見あたりません。ほとんどの寺社が城外に出された景観を描いています。寺社には逐一名称が記載されています。

羽州街道は藤原守春本と同様に城外を通ります。羽州街道と仙台街道は「本道」と表記され、両者は太い朱線、三ノ丸大手口から二ノ丸東大手門へ入る大手道には中太の朱線が引かれています。街道の沿線には町屋があり、その外を囲むように足軽町、寺社が配置されています。城外へ延びる道は「在郷道」とあり、城下と在郷は明確に区別されていました。

全体として、大名が住む本丸を中心に同心円的に身分秩序が顕在化された町割りと言えるのではないでしょうか。また、街道沿いに町屋を置いて商工業の発展を促すまちづくりの意図も窺えます。地盤が軟弱な三ノ丸の西側には屋敷地は設けませんでした。

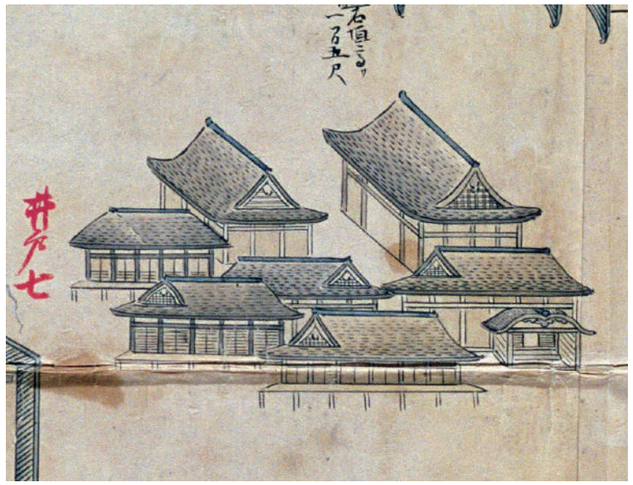
正保城絵図は彩色や記載内容が定められていたため、全国共通の様式で作成されました。河川・水堀は青色、土塁は緑色、道は黄色で着色されています。街路や屋敷境の線は定規を使って線引きしており、整った直線になっています。

このほかに山や木々に関する景観描写が豊かです。千年山の稜線、上部斜面には松とみられる木々が、社寺の背後には林があり、針葉樹と広葉樹等を描き分けているように見えます。また、畦のある田とない畑では色合い、明るさを変えています。城下町の周囲は黄色で縁取りされ、田畑も含め外縁にぼかしが入っています。これは藤原守春本と共通した手法です。

文字情報では大手と搦手、土手の高さ等を朱書しています。また、幕府の指示通り道路の長さを記載しています。藤原守春本と単位は同じですが、六〇間以上は「町」としてまとめています。「□□より、〇町〇間、□□まで」といった記載です。一方で藤原守春本等にあった街路への町名や小路名の記載は一切ありません。

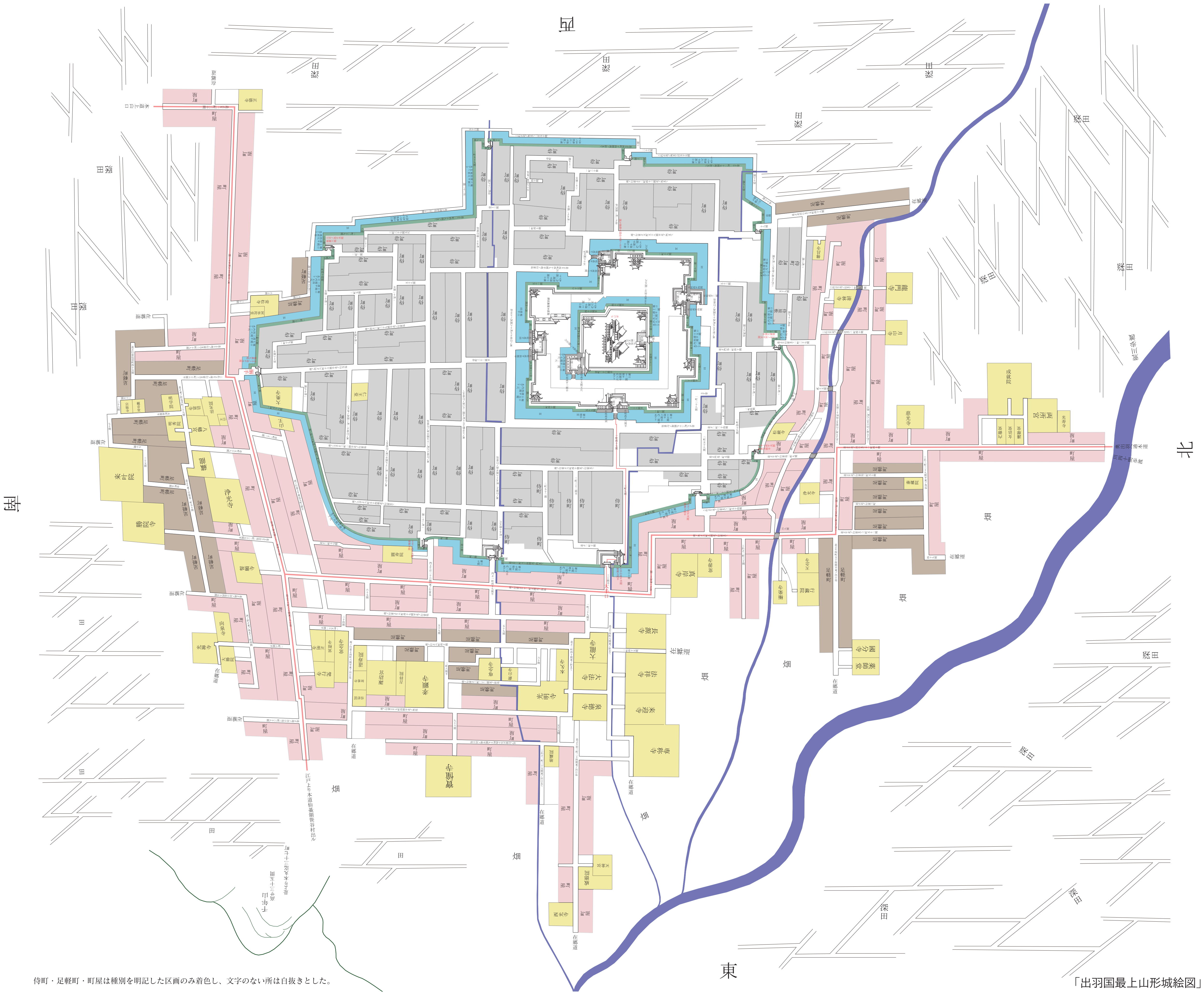
（高橋香乃）

正保城絵図の建物描写　幕府は正保城絵図の作成にあたり天守や櫓、塀（瓦塀・板塀の区別）等、記載すべき内容を定めていました。しかし、御殿は項目になかったせいか、描いている例は少数です。山形城本丸には入母屋造り六棟、寄棟造り一棟の建物が描かれています。各地の城絵図でも天守・櫓等はすべからく絵画的な表現となっており、その共通性は幕府奉行から諸大名家下奉行に「絵ニ書」くよう指示があったことを推察させます。



本丸御殿の描写

二ノ丸三階櫓の描写



侍町・足軽町・町屋は種別を明記した区画のみ着色し、文字のない所は白抜きとした。

「出羽国最上山形城絵図」トレース図

絵図は国元から提出された下図をもとに絵師が浄書するため、描写はある程度図式化されたものとみるべきです。その点を含みながらも、少し細かく見ていきましょう。

郭や門を守る隅櫓や渡櫓はすべて瓦葺きで大棟には鯱瓦がのります。これに対して御殿はすべて木羽葺きです。入母屋造りの一棟には唐破風の式台（玄関）があり、その奥には大きな破風に狐格子のある大書院のような建物があります。六棟のうち三棟は高床建物で壁には板戸が入り、三棟は非高床建物で真壁造り風に描かれています。山形城跡本丸の発掘調査では最上期には大量の瓦と木羽板が出土しており、両建物があったことは確実ですが、鳥居家以降の御殿については定かではありません。

本丸の角には二層の隅櫓が三棟あり、その間を土塀でつないでいます。隅櫓の初層には、北東隅櫓と北西隅櫓が北面、南西隅櫓が西面に千鳥破風があります。土塀の壁には三角形の鉄砲狭間と長方形の弓狭間が描かれています。

本丸は西辺中央に鈍角の折れがありますが、土塁はこの地点で一旦途切れており、二ノ丸側から小さく突出した土橋があることからここには埋門があったとみられます。橋がないので常時使用するものではなかったようです。

二ノ丸の隅櫓は北西隅が単層で他は二層です。西辺には三層の櫓（三階櫓）があり、初層と二層目の屋根には千鳥破風（二層目の北面は向唐破風）があります。この櫓は横矢の位置にあることから、二方向からの眺望を意識したとみられます。東大手門に面した南東と北東の隅櫓にも二面に千鳥破風（前者の東面は向唐破風）がのっています。枡形門の渡櫓には武者窓の表現があります。

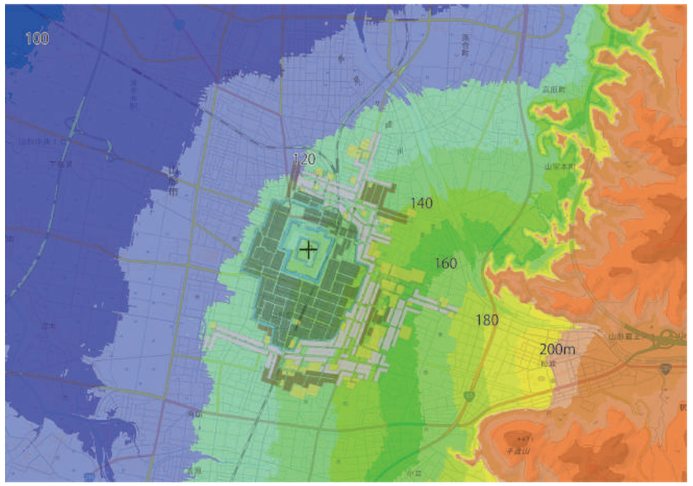
扇状地と山形城の土塁・堀

山形城は三重の堀と土塁に囲まれた輪郭式の平城で、馬見ヶ崎川扇状地の扇端部に立地します。扇頂部と扇端部の平均勾配は一八／一〇〇〇と急です。扇央部を伏流した地下水は本丸・二ノ丸付近で自噴するため、そこに堀を掘って水堀としました。二ノ丸堀は北門と南門の土橋で東側に一定の水位を確保し、三ノ丸堀も十一の門前土橋によって仕切りを設け、水位を調整しています。

本丸の土塁の高さは四方とも二間五尺、堀幅は一二間と一定です。堀の深さは南と東が深く四間一尺～三尺、西と北が三間一尺～二尺となっています。水深は東が六尺と浅く、南が七尺、西～北が八尺と深くなります。本丸は土橋が一箇所しかないため、水は全体に行き渡ります。このことから当時の地表面は東と西で一間程度の高低差があったことがわかります。

二ノ丸の土塁の高さは一間半で根幅は九間ありました。堀の深さは東側が六間半と他より二間半も深く掘っています。標高の高い東側を深くして水深を確保することと、防御のためでもあったとみられます。西側は深さ三間半で東側と同じ水深一五尺を得ています。

三ノ丸には一一の門があり、橋はすべて土橋です。東側にある七日町口と横町口の二門は内枡形で石垣作りとし、二ノ門は格式高い櫓門と

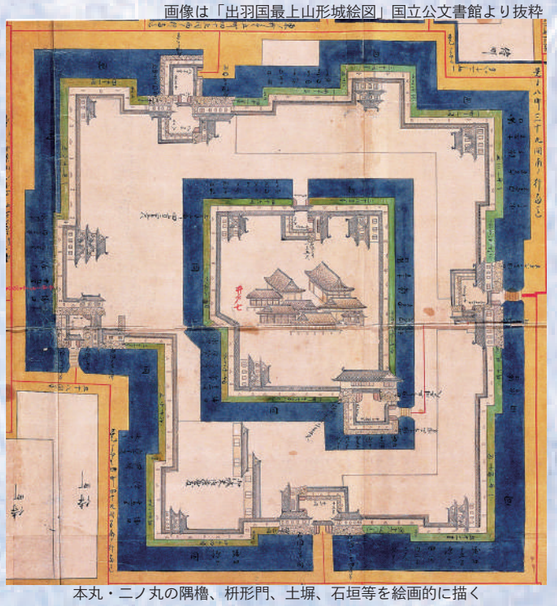


馬見ヶ崎川扇状地と山形城の位置
色別標高図（地理院地図）と絵図を合成。絵図は縮尺不同のため地形図と若干ズレがあります。

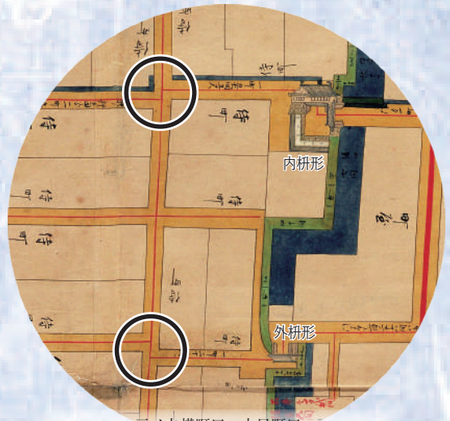
画像は「出羽国最上山形城絵図」国立公文書館より抜粋

羽州街道・仙台街道等に設けられた「鍵折れ」

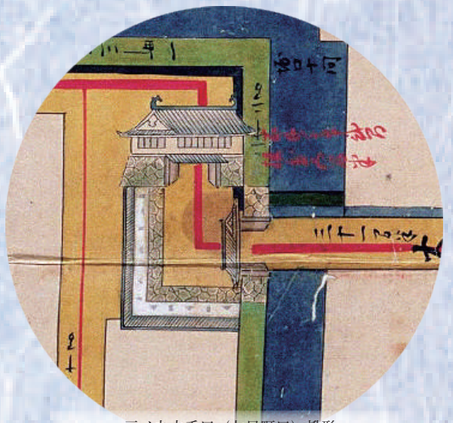
現在も残る旧羽州街道・仙台街道の「鍵折れ」（国土地理院航空写真）



本丸・二ノ丸の隅櫓、枡形門、土塀、石垣等を絵画的に描く



三ノ丸横町口、十日町口
門を入った先の交差点は「食い違い」とします。



三ノ丸大手口（七日町口）枡形
土塀や石垣、渡櫓等を絵画的に描きます。

城下町の周辺には農地が広がっていました。田んぼは斜行する畦、畑は細い縦線で表現されています。城下西側の低湿地は「深田」、南東の扇側部は「田」と書かれています。前者は灌田、後者は乾田を指すとみられます。深田は田よりも黒っぽい色合いに塗られています。

寺社の背後にある樹林は針葉樹と広葉樹を描き分けています。広葉樹の色使いは多彩で、濃淡やぼかしにより奥行きが感じられる絵となっています。御用絵師ならではの巧みな表現といえます。

千歳山は稜線に松林を、斜面には木々の少ない景観を描いています。

としています。十日町口、八日町口、鍔口は外枡形、その他は内枡形となっています。堀幅は七間、土塁の高さは二間が標準です。

堀の深さと水深は地形に応じて各所で差があります。西側の稲荷口から下条口にかけては堀幅がやや狭く、深さは三～四尺と浅めでした。地際まで水が溜まるほど地下水位が高かったからでしょう。一方、北側の肴町口から小橋口東にかけての堀（⑱）は曲線で空堀になっています。この付近は白川（現在の馬見ヶ崎川）の支流、江川（八ケ郷堰）の氾濫原で、厚い砂礫層の堆積が堀の掘削を難航させ、堀底が湧水層まで達しなかったのかもしれません。二ノ丸も北堀（I）は南堀（F）や西堀（G）と同じ深さを掘っていますが水深は浅くなっています。

戦前の山形城の古写真（絵葉書）には水を湛えた二ノ丸堀の姿が写っています。しかし昭和四〇年代末～五〇年代には西堀に水のない時期がありました。現在は井戸から地下水を汲み上げて水堀の景観を維持しています。

（高橋香乃・北野博司）

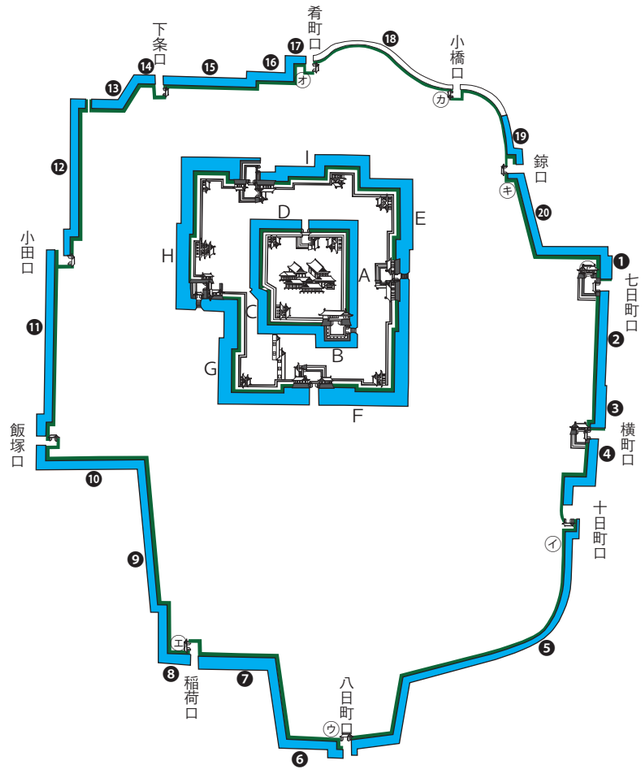
航空写真にみる戦後の山形城（国土地理院）

三ノ丸土塁		土手高	根置
		間・尺	間・尺
㋐	東	2・0	5・3
㋑	東	2・0	5・0
㋒	南	2・0	9・0
㋓	西	2・0	6・0
㋔	北	2・0	5・3
㋕	北	2・0	5・3
㋖	東	2・0	5・3

本丸堀		堀口	深さ	水深
		間	間・尺	尺
A	東	12	4・3	6
B	南	12	4・1	7
C	西	12	3・1	8
D	北	12	3・2	8

二ノ丸堀		堀口 間	深さ	水深
		間	間・尺	尺
E	東	15	6・3	15
F	南	15	4・0	14
G	西	15	4・0	14
H	西	15	3・3	15
I	北	15	4・0	12

三ノ丸堀		堀口	深さ	水深
		間	間・尺	尺
❶	東	10		
❷	東	7	3・3	9
❸	東	7	3・0	2.5
❹	東	7		
❺	南	7	3・4	2
❻	南	7	3・4	3
❼	南	10	3・4	5
❽	南	7	0・4	地形迄
❾	西	5	0・4	地形迄
❿	西	6	0・4	地形迄
⓫	西	6	0・3	地形迄
⓬	西	6	0・3	地形迄
⓭	北	7	0・3	
⓮	北	10		
⓯	北	7	0・4	3
⓰	北	7	1・0	3
⓱	北	7	1・3	3
⓲	北	7		空堀
⓳	東	6	3・0	6
⓴	東	6	3・5	6



正保城絵図にみる山形城の堀と土塁の高さ

藤原守春本を再考する—通説への疑問

藤原守春本（以下、守春本）には「最上家山形城の姿を描いた優品」という価値付けを多くの研究者が与えています。まず、書写年代を知るために藤原守春という人物をみていきます。

守春は幕府お抱えの狩野派の絵師です（石川二〇一九）。明治の終わりに刊行された『東洋美術大観』第五冊[注1]には「狩野壽子系図」を引く形で表絵師芝愛宕下狩野家六代目として「即譽守春」の名が登場します。ちなみに画人伝として名高い『古画備考』等[注2]では「即譽」とありますが、「不知名、文化頃人（扶桑名画傳三八）」とされ、幕末にはもう名が伝わっていなかったことが記されています[注3]。守春が本絵図の書写に関わったのが寛政～文化頃とすると、原本は一八世紀末以前に作成されたことになります。高橋信敬氏は根拠は明示していませんが、守春本を書体から秋元家時代（一七六七～一八四五年）の写本と推定しました（高橋一九七四）。

全国にある城絵図のうち、慶長から元和・寛永期の縄張りを描いたものとしては一七世紀半ば～後半に成立し、江戸で流布した『主図合結記』や加賀藩の軍学者有沢永貞が一七世紀末～一八世紀初に編纂した『諸国居城図』が知られています。これらは初期の城郭修補願絵図や正保城絵図の情報をもとに作成された可能性が指摘されており[注4]、この系統に属する絵図集には山形城もそれぞれ掲載されています[注5]。城下絵図は正保城絵図の図像情報をベースにしており細かい屋敷割等を記載するものはありません。守春本ないしはその原図の成立が十七世紀前半に遡る可能性は低く、城の縄張りや街路は正保城絵図系統の図像情報を参考にしたと考えるのが妥当です。

これらは江戸を中心に諸国大名家等に流布したのに対し、最上期の山形城絵図は涌谷亘理家本Iと致道館本が山形領に隣接する陸奥伊達家領と庄内酒井家領に伝来したほかはすべて領内、県内で伝来しました。山形で作成され、書写された絵図といえます。

守春本の図像情報の中でまず目につくのは二ノ丸堀の周囲に空閑地があることです。お城の中心部は涌谷亘理家本Iや伊藤本と同じ二ノ丸の北辺に二箇所の虎口がある形態を描いていますが、二ノ丸内の屋敷割りが涌谷亘理家本Iや伊藤本等に比べて省略されています。また、二ノ丸虎口と三ノ丸街路との接続は道路の枠線を欠いていて不自然です。三ノ丸内には最上家の重臣屋敷が虎口を固めるように配置され、由緒ある有力寺社が存在します。一方、江川（八ケ郷用水）の北側には正保城絵図にはない足軽町のブロックが二つあります。薬師堂の南側はそのためか江川が大きく蛇行するように描かれます。正保城絵図との比較では鍵の手や食い違いを省略して直線道や十字路にしている所、大きな屋敷地で道が途切れている所がありました[注6]。守春本は五日町と八日町通りを八日町口の鍵の手を挟んで同方向とし、本町・十日町通りの角を直角とするなど、街路よりも屋敷割りを重視している印象を受けます。

描画法では清絵図である正保城絵図は定規で丁寧に直線を引くのに対し、守春本は明らかにフリーハンドとみられる線が多く、屋敷境や町屋の区画線（朱書）は雑な感が否めません。

文字情報では、各屋敷に侍、足軽らの名前を丹念に書き込んでいるのが特徴でした。このような屋敷割図は、藩用図とみられる慶安二年（一九五〇）頃の「弘前古御絵図」や寛文一三年（一六七三）の「弘前中惣屋敷絵図」（津軽家文書）が早い例で、正保城絵図の控図をベースに作成したものと考えられます。二ノ丸東側の屋敷名が空白となっている点も意味深です。伊藤本等でここにあった重臣屋敷が三ノ丸に移転したのか、三ノ丸虎口に重臣を重点的に配している守春本の景観が史料等で裏付けられるのか、今後検証する必要があります。

守春本に書かれた侍名は伊藤本等と共通する

ものも多く、最上家の分限帳を情報ソースにしたと考えられます。屋敷数は三ノ丸内で五一五（寺社等含む）、全体では一六一五にのぼります。伊藤本の総構え内の屋敷数は約四四〇でした。義光の旗本（直臣）は四八〇名ほどといわれます。今後各種分限帳との対比を行い文字情報の出典等を探っていくことが必要となります。

結論として、ここでは守春本（の原図）は正保城絵図系の街路図に最上期の本丸・二ノ丸等の景観を合成し、分限帳等の文字情報と史料、伝承を考証して作成した編纂絵図ではないかという仮説[注7]を提示します[注8]。

城内三ノ丸（総構え）を通っていた街道をこの頃に城外に移転した例は奥州二本松城や羽州上山城の例があげられます。二本松城は丹羽長重が入部した寛永二〇年（一六四三年）以後、上山城は元和八年（一六二二）に入部した能見松平氏によって寛永年間に付け替えられました。同じく最上家改易後に入部した戸沢氏が整備した新庄城も三ノ丸の外に羽州街道を通しています。山形城で羽州街道が三ノ丸の東側に付け替えられ、大規模な町割り変更が行われたのは鳥居家入部後とするのが妥当と考えます。

さて、将軍家画工、狩野守春が本図の書写にあたり手がけた範囲はどの程度でしょうか。守春本には屋敷の空白を埋めるような形で樹林と赤焼けの空を描いた箇所がありました。城下町を縁取る彩色のぼかしも含め、表絵師としての出自を窺わせる表現といえるでしょう。それに比して一部の雑な線描や侍名の書き入れははたして守春の手によるものなのでしょうか。

「山形藩藤原守春写之」の署名と印は、北を上にして軸装する際に、本紙を切り取り九〇度回転させられています（市村二〇二〇）。署名はもともと西を上に描かれていました（「御本丸」の書き込みは東が上）。その脇には本紙が破られた跡があり、ここには墨痕があってもう一つ添書きがあった可能性があります。

これまで本絵図は「山形藩藤原守春」の署名と他にはないビジュアルな仕上がりによって特別な地位を与えられてきたように思います。しかし、守春本は同時代の公用図ではなく、後世の編纂図と言わざるを得ません。この仮説の当否は今後の検証に委ねますが、守春本の史料的価値に異議をとなえるものではありません。

守春本ないしはその原図[注9]の成立年代は、減封や幕領期を経て荒廃しつつあった山形城の再興に尽くした秋元家の時代、十八世紀末～十九世紀初頭頃と推察しておきます。かつて繁栄を誇った「大山形城」を思慕するのは太平の世ならではのことだったと思います。

（北野博司）

注1　寧美書院編『東洋美術大観』第五冊　一九〇九年　国立国会図書館デジタルコレクション

注2　朝岡興禎『古画備考五〇巻』小川実増補稿本　国立国会図書館デジタルコレクション　朝岡興禎『増訂古画備考』三九　太田謹補　思文閣出版　一九〇四年、堀直格『扶桑名画傳』一八九九年（名著普及会復刻版　一九七九年）

注3　狩野家の墓所「池上本門寺」芝愛宕下狩野家の墓地には五代目探円守胤（寛政一二年没）と七代目探玄守明（天保五年没）、その間に「即養（文化二年没）」の墓標があります。「譽」と「養」は音が似ており守春墓の可能性はあるものの、南之院過去帳はすでに焼失しており現状では特定できません。系図で号が確認できないのは、何らかの理由で江戸を離れたのかもしれません。

注4　神山仁「江戸時代初期の城郭絵図―正保城絵図と城郭修理願絵図の成立について」『城郭史研究』第一七号　城郭史学会　一九九七年、木越隆三「元和～寛文期の金沢城修築について」『金沢城研究』創刊号　金沢城研究調査室　二〇〇三年

注5　「出羽国山形」『主図合結記』蓬左文庫蔵、「羽州山形」『諸国居城図』尊経閣文庫蔵、「出羽山形」『諸国当城之図』広島市中央図書館浅野文庫蔵、「羽州山形城図」『極秘諸国城図』松江歴史館蔵、「羽州山形城図」『日本分国絵図』国立公文書館蔵、「出羽国山形城図」「羽州山形城之図」『日本古城絵図』国立国会図書館蔵、「羽州山形」『扶桑城図記』国立国会図書館蔵、池田家文庫「羽州山形」岡山大学附属図書館蔵など

注6　例えば、前者は梵行寺（千寿院）前の折れ横町口から入った最初の辻。後者は勝因寺境内や山邊右衛門大輔屋敷。

注7　石川藤男氏は三ノ丸の土塁や堀等が鳥居家以降に作られたと考えることを根拠に「現在のところ『最上時代の絵図』は存在しない。鳥居以後の絵図に『最上時代』を描いている」と結論付けました（石川二〇一九）。しかし、天正から文禄、慶長期にかけて総構えを構築する城下町は少なくありません。鳥居時代にも三ノ丸虎口や土塁等を整備したことは確実とみられますが、涌谷亘理家本Ⅰ等が描くような総構えが最上期にあった可能性は高いと考えます。

注8　異なる年代の情報を合成する例として、一七世紀末に成立した有沢永貞『諸国居城図』の「慶長期金沢城図」をあげておきます。ここでは寛永八年以降の縄張りに慶長期の重臣名を合成しています。

注9　これまで「藤原守春写之」によって類似の原図の存在を前提に論じられてきましたが、創作の可能性を含め、本絵図制作の技術や成立の背景を総合的に考察することが必要です。

最上期山形城絵図を研究してみたい方へ

・秋葉正任「致道博物館所蔵の最上氏時代山形城絵図」『村山民俗学会会報』第二五六号　二〇一三年
・石川藤男「鳥居忠政・忠恒公の業績を探る」『研究資料集』第三八号　山形郷土史研究協議会　二〇一七年
・石川藤男「城絵図でみる山形城～三の丸は鳥居公が構築～」研究資料集』第四〇号　山形郷土史研究協議会　二〇一九年
・市村幸夫「新出の山形城下絵図について」『歴史館だより』№一四　山形県文化振興事業団最上義光歴史館　二〇〇七年
・市村幸夫「慶長期の山形城下絵図」『山形市文化振興事業団紀要』第一二号　二〇一〇年
・市村幸夫「宮城県図書館所蔵の山形城下絵図」『村山民俗学会会報』第二六三号　二〇一三年
・市村幸夫「山形城下絵図『藤原守春本』の謎」『雑草の唄』第二八号　二〇二〇年
・伊藤清郎『最上義光』日本歴史学会編　吉川弘文館　二〇一六年
・小形利吉「鳥居忠政の山形城防備強化と三の丸構築」『研究資料集』第一七号　山形郷土史研究協議会　二〇〇五年
・工藤定雄「江戸時代の市街図」『山形市史』別巻二（生活文化編）山形市　一九七六年
・財団法人最上義光歴史館編『図録山形県城郭古絵図展』一九九一年
・齋藤仁「最上氏時代山形城絵図の再検討」『最上氏と出羽の歴史』高志書院　二〇一四年
・齋藤仁「最上氏時代山形城絵図に関する一試論―「さんせい」「西仙」と父子間権力構造について―」『山形史学研究』第四三・四四合併号　山形史学研究会　二〇一四年（竹井英文編『最上義光』シリーズ織豊大名の研究六　戎光祥出版所収）
・齋藤仁「山形城絵図『涌谷亘理家本Ⅰ』の検討に関するノート」『山形県地域史研究』第四五号　山形県地域史研究協議会　二〇二〇年
・高橋信敬『最上時代山形城下絵図』誌趣会　一九七四年
・武田喜八郎「藤原守春本と新出の『山形城内絵図』の問題点について」『山形市文化振興事業団紀要』第一四号　二〇一三年
・横山昭男「近世都市山形の成立と最上義光―山形城大拡張の時期をめぐって―」『研究資料集』第二〇号　山形県郷土史研究協議会　一九九八年（竹井英文編『最上義光』シリーズ織豊大名の研究六　戎光祥出版所収）

謝辞

本研究にあたり下記の機関、個人にお世話になりました。記して感謝申し上げます。宮城県図書館、山形県立図書館、公益財団法人致道博物館、市村幸夫、伊藤誠一、黒子順一、杉山恵助、土屋威夫、野口一雄。市村幸夫氏からは研究資料をご提供いただくとともに、絵図調査にあたりご高配を賜りました。

本書は東北芸術工科大学歴史遺産学科の学生有志が二〇二二年度に取り組んだ「最上期山形城絵図再考プロジェクト」の成果をまとめたものです。

北野博司（歴史遺産学科教授）、芦野七海、加藤彩花、髙橋芽生、土井愛夕美（四年）、髙橋香乃（三年）、遊佐穂乃香、扇采加（一年）。表紙：石川楓（三年）。学年は二〇二二年度。

翻刻作業

絵図の調査

入力作業

翻刻作業

最上期山形城絵図の世界

二〇二三年五月二〇日　発行

編　集　最上期山形城絵図再考プロジェクト
発行者　東北芸術工科大学歴史遺産学科
住　所　990―9530
山形市上桜田三丁目4―5
023―627―2000